

に象徴されている。」と指摘するが、いずれも視点が少年期の「私」に留まっている。

だが作品冒頭において「成長そのものの思ひ出が、悲劇でなければならぬのか。私には今もなほ、それがわからない。」と問うている。また「大人になるといふことが私には一つの完成あるひは卒業だとは思へなかつた。少年期は永劫につづくべきものであり、又続いてゐるのではないだらうか。」と述べている。「成長」の内実を明らかにするには、少年期を振り返る「私」を含めて考察しなければならぬと考える。

本発表では少年期を振り返る「私」にまで着目し、「私」の「悲劇」的「成長」とはいかなるものであるか探っていく。

《中国学》

馮延巳詞研究

— 女性像を中心に —

博士後期課程三年 白 小 薇

馮延巳（九〇四〜九六〇）は、南唐詞を代表する詞人である。彼の百首あまりの作品が『陽春集』に収録されている。

五代詞壇において、温庭筠を始めとする花間詞派の「濃艶軟媚」の詞風に対して、馮延巳は娯楽にふけりながら、政治家として、また芸術家として、時代に対する鋭い洞察力をもって、清新かつ濃厚なうら寂しい趣のある作品を創り出した。特に同時代の花間詞人が、専ら女性の外向的な美しさの描写にこだわるその当時に、馮延

巳は、女性の心情描写をめざすと共に、豊かな感受性を持つ教養の高い女性像を描写の中心とした。彼の詞には、国の情勢、南唐の将来に対する強い不安と予測があるため、見事に五代の時代精神を伝えたといえよう。要するに、彼の素晴らしい創作技巧によって、詞というジャンルの格調が一段と高められたのである。

今回の発表は、馮延巳の代表作を基にして、特に『花間集』との比較研究をすることによって、南唐詞にある女性像の審美意識を追求したいと思う。

児嶋獻吉郎の支那文学史研究について

博士後期課程一年 杜 軼 文

明治三〇年代前後は、日本においては集散的に「中国文学史」が編纂されていた時期である。児嶋獻吉郎は『支那文学史』と題して、早くも明治二十四年（一八九一）に雑誌に中国文学史に関する研究結果を発表した。その後、明治四十五年まで一連の支那文学史の出版が続いた。数量的に、児嶋の著作は非常に多かったが、それらについての研究者の分析検討は極めて少なかったのである。

今回私は、児嶋の支那文学史研究を明治時代における文学研究法の変遷の一例として取り上げ、その編纂視点を明らかにしたいと考えている。

第一に、児嶋の学生時代について考察する。即ち、彼の漢文学習の経緯、当時の漢文学者たちとの交流を重点的に延べ、その中国文学価値観の形成を分析する。第二に、明治二十四年より四十五年ま